Aprire

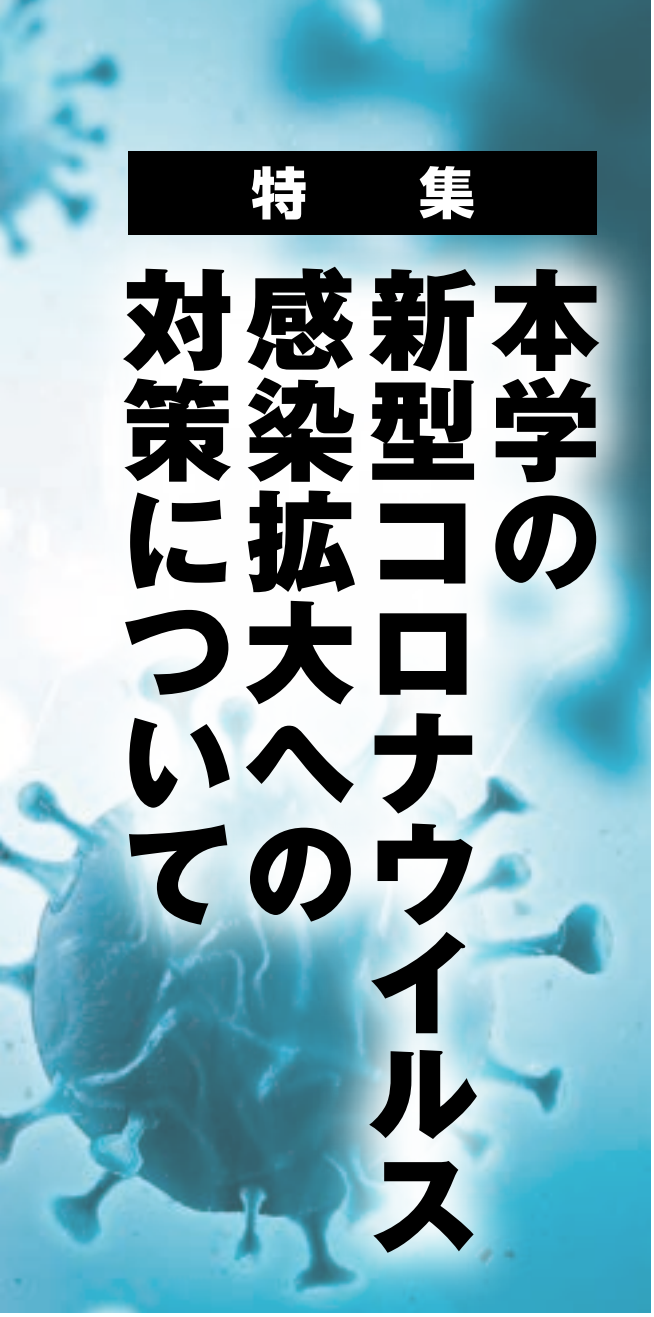
秋田大学広報誌［アプリーレ］

No. 68

2020.07

特集

本学の新型コロナウイルス感染症の対策



特　集

本学の新型コロナウイルス感染拡大への対策について

秋田大学長　山本　文雄

今年は、新型コロナウイルスのパンデミック化により、日本のみならず全世界が未曽有の被害に見舞われています。たくさんの人命被害に加え、不要不急の外出自粛に起因する経済的大打撃による多くの被害が出ている現状があります。秋田大学に目を向ければ、卒業式や入学式の中止、大学への休業要請、On lineによる授業の再開など、これまで経験したことのない事態への対応に追われているのが現状です。不要不急の外出自粛要請に対しては、一部の心無い人々によるルール違反も指摘されておりましたが、わが秋田大学の学生諸君は、ほとんどの方が、このルールを理解し、順守してくれたことを誇らしく

Aprire
秋田大学広報誌［アプリーレ］

CONTENTS

02 ［特 集］本学の新型コロナウイルス感染拡大への対策について
学長メッセージ
04 後藤理事メッセージ
05 国際資源学部
07 教育文化学部
09 医学部
12 理工学部
14 経営協議会委員メッセージ
16 新型コロナウイルス感染症対策の学生支援制度

COVER PHOTO

今回の表紙は、新型コロナウイルス感染拡大への対策が行われた大学構内の様子です。秋田大学は、学生と教職員の生命と健康を守ることを最重視し、入構規制・施設の休館措置や、サーモグラフィーカメラによる検温、アルコール消毒、またオンライン授業に切り替えるなど徹底した対策を行っております。　広報課

感じる次第です。

一方で、この新型コロナウイルスの問題は、ワクチンや治療薬の開発ができていない現状では、どのように展開していくのかは、まだまだはっきりしませんが、自粛要請によって他国ほどの感染者数や死者数を出すことなく収束に向かっている感もありますが、2波、3波の襲来も指摘され、政府は、感染コントロールと経済回復のバランスを保ちながら、新たな生活様式の確立を目指す方向に舵を切りました。この結果、感染予防を常に行いながらの日常生活を余儀なくされ、コロナ前の経済状態にいつ復帰できるのかは分からないのが現状です。深刻な不況、産業構造の変化、企業の連鎖倒産などがすでに指摘され、こういった問題は我が国のみならず全世界に波及しており、世界中が青息吐息の状況であります。こういった影響からいつどのように脱却できるかは全く想像できませんが、我々を取り巻く環境は新しい生活様式という表現で述べられており、コロナ問題前に比し、著しく変化することは確実であります。こういった中、身近で喫緊の課題になりそうな就職問題が学生さんたちを直撃することとなり、バブル崩壊後の「就職氷河期」とは比べ物にならないような事態になることが想像されます。ポストコロナ、ウィズコロナの社会においては、何が必要とされ、何が必要なくなるのかを、いち早く探知し、こういった新しい社会へ十分に順応できるように、学生さんたちに情報発信していく必要があると思います。

秋田大学では、これまで築いてきた各学部の伝統を堅持しながら、4学部、4研究科の総合的な教育研究体制による最先端の教育研究を進めるとともに、ビッグデータの活用やIoTの普及、5G、6Gの到来、そして人工知能の発達によるSociety 5.0への対応が今の若者に要求されていることから、昨年の大学創立70周年を契機に、各学部においてこの先10年の未来を見据えた学部改革を開始いたしました。その直後のコロナ問題勃発ですが、授業や実習のやり方を考えるだけでも、3密を避ける必要性から、遠隔というkey wordは外すわけにはいきません。こういったコミュニケーションの取り方に激変が起きているわけですが、どのような社会形態になろうとも、不確実な未来に向け、自信を持って羽ばたいていける学生の教育、今、これが最も求められているものと認識しています。「学生第一」をスローガンに掲げ、全ての教職員が学生にきめ細やかな教育環境を提供し、知的好奇心を育んでいけるよう努力しているところであります。そして、ポストコロナ、ウィズコロナの社会においては、こういった新しい社会へ十分に順応できる学生を輩出し、秋田大学の存在感をより高めていくように教職員一同頑張って邁進するつもりであります。

理事（教育・学生・国際担当）・副学長　後藤　猛

新型コロナウイルス感染症の感染拡大は私たちの生活様式を一変させてしまいました。

秋田大学では感染クラスター発生の危険がある対面授業を回避し、令和２年度前期は原則としてすべての授業を遠隔で行っています。この遠隔授業の実施にあたっては、講義資料の公開、テスト問題の作成と実施、レポートの収集などをネット上で行うことができるe-ラーニングシステムWebClassをプラットホームとして活用し、同時双方向型授業のためのZoomと動画配信のためのStream(Office365)とを連携させています。開始当初は遠隔に不慣れなことによる相談も多々ありましたが、WebClassのハード面の強化や利用ルールの統一により大きなトラブルも無く順調に行われています。なお、ネット環境が不十分な学生に対しては、ＰＣ実習室やＷｉ-Ｆｉ教室を許可制で使用してもらっています。

一方、学生の感染防止のため本学としても様々な対策を行ってきました。国内外で感染が懸念され始めた２月末から行動自粛が緩和された５月末まで、学長主導による対策会議を毎朝開催し、海外渡航中の学生や教職員および一時帰国中の留学生一人ひとりの健康状態とその周囲の情勢、さらに、就職活動等のやむを得ない事情で秋田県外に移動するすべての学生をチェックし感染対策を指導してきました。県内で行動自粛をしている学生にも注意を払い、体調に少しでも異変がある場合には保健管理センターを通じてケアをしています。大学生協食堂は３密の危険性が高いところですが、距離を取った一方向の座席配置や利用毎のアルコール消毒など、最大限の感染対策で営業して頂いています。

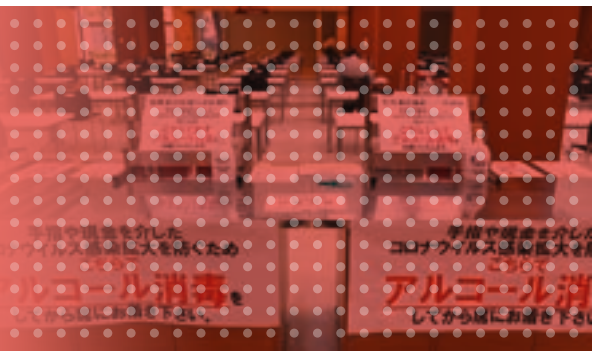
学生支援としては、学生支援・就職課や保健管理センターに相談窓口を設けて学生からの相談に対応してきました。アルバイト収入の激減などによる経済的な問題については本学独自の経済支援制度を設けたほか、授業料免除申請の受付期間を延長しています。留学生に対しては英語による情報発信や個別連絡も併せて行っています。また、自粛期間の長期化による学生のメンタルの心配については、医学部の協力によるアンケート調査によって問題を抱えている学生を早期に発見し、保健管理センターと協働でカウンセリングを行っています。

６月１日からは政府や秋田県の「新しい生活様式」の方針に則り、アルバイトや課外活動の段階的な再開を認めています。また、完全に停滞していた大学院生や学部４年生の研究実験活動についても３密の回避やマスクの着用、手指の消毒等の十分な感染対策を取りながら段階的に再開しているところです。

いま大学では「主体的に考える力」の育成を目指し、従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、学生が主体性を持って課題を発見し解を見いだしていくアクティブ・ラーニング型授業への転換が進められています。この教育改革の一環として、本学では対面授業を補完・強化するツールとして前述のWebClassが５年前に導入されましたが、今回その利用が一気に加速することになりました。すべての教員は遠隔でも十分な教育効果が得られるように授業コンテンツを様々に工夫しながら開発し活用しています。遠隔授業開始後の学生アンケートでは、WebClassを介した資料提供により予習と復習が容易になり理解が深まった等の遠隔授業に対する肯定的な意見も多くありました。ポストコロナにおいては教育のデジタル化が進み授業の形態も大きく変容すると言われています。そこでは、今回いみじくも得られた遠隔授業の経験と豊富なe-ラーニングコンテンツは、有益な財産として従来型の授業と有機的に融合し高度に活かされてゆくと思います。

学生のために準備したPC実習室

国際資源学部



国際資源学部長
藤井　光

新型コロナウイルス感染症の世界的蔓延に伴い、経済活動は世界的に縮小傾向がみられています。国際資源学部が人材育成を目指す資源・エネルギー分野においても、この短い期間で様々な出来事が見られました。中でも需要の減少により原油価格が4月20日にバレル当たりマイナス37・63ドルを示したことは大きな衝撃で、石油産業はあと50年は大丈夫と学生に機会あるごとに話している私は冷汗をかきました。

コロナ禍における経済活動が低下したここ数か月では、大気中のCO_2濃度増加率が大きく減少したというニュースがありました。しかし、快適な消費生活に慣れた現代人がコロナ終息後はもとの生活に戻ることは間違いなく、温暖化対策の重要性は変わりません。太陽光発電、風力発電、これらを有効に利用する蓄電技術、電気自動車などは温暖化対策に有効ですが、これら技術には様々な金属の使用が不可欠です。しかし、これらの金属を産出する国にはアフリカや南米などの経済基盤が脆弱な国が多く、コロナによる資源生産能力低下のため、収束後の需要増に対応できない心配があります。また、資源は生産すると枯渇しますので探し続ける必要がありますが、新規探鉱活動の停滞も不安材料です。

海外資源フィールドワーク・インドネシアにて

これらを念頭に国際資源学部ではコロナ後の資源産業において即戦力となる人材の育成に全力を挙げて取り組む予定です。本年度は海外渡航が制限を受ける可能性が高いですが、安全には最大限の配慮をして、海外資源フィールドワークや研究渡航の実現を目指します。また、現場で体験できないことはVRなどを用いて効果的な学習を目指します。資源の重要性はコロナ後も不変と考えています。

研究室でのVR体験

国際資源学部

資源政策コース1年次　三春　凜佳

4月から始まった大学生活を楽しみにしていましたが、授業の選び方や時間割の作り方が分からず、とても不安でした。しかし、幸いにもSNSを利用して先生方に相談する機会を作っていただきました。相談する度に丁寧に教えていただきとても嬉しく思いました。

現在はオンライン授業のみのためクラスメイトと直接会えない不安はありますが、Zoomを利用した授業での話し合いやプレゼン発表を行ったりすることで大学生活に対する高揚感も湧き上がってきました。

オンライン授業は普段の対面授業と同じ時間に行われます。そのため、早起きや決まった時間に朝食をとるなど、規則正しい生活を送っています。また、授業以外の時間は「Online-All-Rooms」というオンラインでの英会話に参加しています。様々な学生と交流でき、気軽に参加できるので楽しい時間を過ごしています。この先も自宅で過ごす時間が去年と比べて増えると思いますが、工夫して充実した時間を過ごしていきたいと思います。

国際資源学部

資源政策コース3年次　武田　直人

今回の新型コロナウイルス感染症においては、今まで経験したこともない規模の制約を体験しました。11年前に新型インフルエンザの流行も体験しましたが、外を歩く全員がマスクをする、まして外に出ること自体がタブーとなるまでの生活の制約はなかったように思います。

幸いにも、情報伝達技術が向上しているために、このような状況でも学ぶことができ、私自身も平時とさほど変わらないクオリティで大学の学習に励めています。自宅からも受講できるという点は、今後わざわざ住む地を変えずに好きな大学を選べる、新しい大学の在り方が広まるのではという期待があります。

一方、今年控えている海外資源フィールドワークは実施時期が未定、また景気への打撃によって就職活動に影響するなど、不安も沢山あります。しかし、自分の力だけでどうにかなるものでもないので、普通の生活が戻ってくることを願いつつ、今の状況でもできることをこなすよう努めます。

教育文化学部

教育文化学部長
佐藤　修司

教育文化学部が対象とする教育や心理、社会、文化は人と人とのつながりやふれあいを不可欠の前提としています。今回、当たり前のありふれた日常がいかにもろい土台に立っていたのかを露呈させました。もちろん、戦争も災害も地震も、いともたやすく日常を崩壊させるのですが、人は日常のもろさを忘れ、見ないようにして生きています。生と死、健康と病気、光と影、これらは対立しているように見えて、グラデーションをなし、密接不可分であるように、今回突然訪れた非日常的空間も日常的空間と連続しているのです。

遠隔授業や会議で使用するZoomなどを通したデジタル空間は、これまで超え難かった時空をつなぎ、感染拡大という非常時における新たなコミュニケーション・ツールとなりました。でも、それだけに一層、これまでの日常における何気ないつながりやふれあいのかけがえのなさに気づかされます。新型コロナ後の世界では、デジタルとアナログ、対面と遠隔、そのバランスの中で生きていくしかありません。新しい生活様式が日常になる世界はどのようなものなのか、それが新たな教育・研究の課題となり、模索が続きます。

附属学校園は3月2日から、卒業(園)式と始業式を除いて、休校・休業となり、5月11日から分散登校、6月1日からようやく通常再開となりました。通常再開とはいっても感染防止のための間隔保持、手洗い、マスクを徹底した非日常はまだ終わりません。

附属小学校での教育実習の様子

教育文化学部　学校教育課程　こども発達コース1年次　小林　亜莉亜

楽しみにしていた大学生活、蔓延する新型コロナウイルス感染症の影響で私の心は不安でいっぱいになりました。しかし、先生方のご尽力や同じコースの友達との情報共有など、様々な支えのおかげで現在までやってくることができました。

遠隔授業は機械が苦手な私にとって恐怖でしかありませんでしたが、先生方の創意工夫のおかげでしっかりと参加できていると思います。

私の在籍するこども発達コースでは、初年次ゼミで顔を出して出席確認などを行っているので、画面越しでも先生方や友達の顔が見れて、私は嬉しいです。事態が収束してはやくみんなに会いたいと思います。

私は将来教師を志していますが、このような緊急事態の際に迅速な対応ができるか、今はまだ不安があります。どんなことが起こっても冷静に動ける教師になるために、これからも秋田大学で学び続けていきます。

右から2人目が小林さん

教育文化学部　地域文化学科2年次　工藤　やよい

秋田県内外での観光も差し支えないと発表された六月の某日、今までほとんど外に出ることなく過ごしていた私は、数か月ぶりに遠出しました。そのときの一番の感想は「いつの間にか夏がはじまっている！」です。久しぶりに浴びた日光は眩しく、空の青色が濃く見えました。私は自粛生活を経て、月日の感覚が少しばかり狂わされていたようです。

カレンダーは数字によって月日を教えてくれます。しかし、五感すべてを通じて教えてくれるわけではないので、実感がありません。教室で講義が行われていた「日常」では、必然的に外出する必要がありました。大学までの道のりは、私に季節の移り変わりを知らせていてくれたのです。「新しい生活様式」を踏まえつつも、季節を感じる機会も大切にしなければいけないように思います。人と人との距離が図られる今日ですが、人だけではなく、様々なものとの適度な距離も保つべきなのかもしれません。

医　学　部

医学部長　尾野　恭一

今年になって首都圏を中心に感染者数が増加してきた新型コロナウイルス感染症が、3月末から4月にかけて秋田県にも及び、卒業式や入学式が中止となり、授業開始も5月連休明けに遅れることになりました。

これまでは一切の実習を中止し、全てがWEBを通じての座学のみでしたので、将来医師や看護師等の医療人を目指す学生達は、感染への不安がある一方で、現場を体験することのできないじれったさや焦りを感じているだろうな、と心配していました。最近になって、ようやく病院での実習が始まったことで、少し前向きになってくれていると思います。学生には、「大丈夫。この数ヶ月の空白なんていつでも取り返せる」と励ましながらの生活が続いています。でも、よくよく考えると、世界的な感染症流行とその後の時代という、歴史的大転換期を体験しているわけで、この時期全体が規格外の臨床実習なんだと前向きに捉えてもいいんじゃないかと思います。

世界中がコロナウイルスの脅威に直面する中、感染の恐怖に怯えながらも勇気をもって患者の治療にあたる医療関係者の姿と、彼らを応援するメッセージがメディアを通じて世界に発信されています。「後に続こうとしている若者が、ここにも大勢います」と、声を大にして伝えたいです。

新型コロナウイルスに対するワクチンや治療薬の開発が進んでいますが、実用化の時期はまだはっきりしていません。その間は「Withコロナの生活様式」を作り上げ、それを実践しなければなりません。おそらく1～2年(世界的にはもっと長い期間)は続くと覚悟しておいた方がよいと思います。

医学部保健学科長　安藤　秀明

昨年末より武漢で新型コロナウイルス感染症の感染が報じられ、徐々に日本全国でも感染者が散発。前期試験の会場対策が、新型コロナウイルス感染症の感染との戦いの初めであったと思います。そして、保健学科では、タイ王国、シンガポール、オーストラリアへの学生短期留学が計画されており、その可否の判断を直前まで悩みましたが、参加予定学生全員に説明して延期しました。この説明会で、実習参加のため大学に来られない学生の

ために、リモート(Zoom)併用で説明したのが遠隔会議のはじまりでありました。その後、後期試験の実施対策、卒業式開催中止。保健学科では、学位記授与式を実施し、保護者等のため、その様子をリモート配信しました。

その後、日本全体で感染拡大のため、在学生に対しては、3月中旬までに秋田県内にもどり、巣ごもり生活をお願いしました。これが、結局は2か月続いたことになります。授業の開始は、5月中旬からでしたが、以前より準備していたe-ラーニングを進めていた学生が多く、頼もしく思えました。

現在感染のコントロールが行われ、徐々に規制が緩和されてきています。しかし、第2・3波が来るのは確実です。第1波に対しては、初めての経験であるため、最大限の対策をとりました。次回以降は、より有効な対策を選択できると思います。そして、今回の対策で、リモート・コミュニケーションというSociety5.0社会が急速に進みました。しかし、まだ技術を導入しただけで、その質を評価されてゆくのはこれからであります。

新型コロナウイルス感染症流行によるダメージは大きかったですが、そこから学び変革できたことも少なくありません。そして、ここからまた新しい社会のスタートであると考えています。

附属病院長　南谷　佳弘

秋田大学医学部附属病院は秋田県内唯一の特定機能病院として、県内の他病院では治療が難しい患者さんの診療を行っています。これらの患者さんは感染すると重症化しやすいため、秋田県新型コロナウイルス感染症対策協議会で重症以外のコロナ感染症の診療を行わない病院に区分されました。また首都圏ではコロナ感染症の院内感染が多数報告されました。これを重く受け、院内にコロナを持ち込まない水際対策を徹底して行っています。例えば外来入り口を一カ所にして高精度のサーモカメラで病院に入る方全ての体温測定を行っています。もし患者さんに発熱がある場合は別の入り口から特別診察室にご案内して診察を行っています。院内の3密を避けるために外来受診の制限や不急の治療の延期をしました。職員も同様に標準予防策の徹底とともに3密を避ける行動をきっちり守っています。たいへん申し訳ない事ですが、構内への部外者や学生の立入も制限しました。一方、行政から補助を受けながら、重症患者さんを受入れる万全の準備を整えてきました。幸いコロナ感染症患者さんは受診も入院もしませんでした。しかし、今後第2波、第3波が確実に来ます。今まではそれに対する準備時間と思い、この時期こそ気を引き締めて特定機能病院としての機能を維持する重責を全うしたいと思います。

医学部　医学科1年次　石山　真桜

入学式が中止となり、遠隔授業という形で大学生活がスタートしました。慣れないことの連続で、直接コミュニケーションがとれないことで制限される情報量にも驚いています。仲間と一堂に会する機会は未だなく、制限の多い日々が続きますが、現状で可能な方法で人との繋がりと学びを広げていきたいです。

自粛生活には一定の不自由さも感じましたが、自宅にいる期間が健康を考える良い契機となり、新型コロナウイルス感染症について知るたびに感染症の影響の大きさや公衆衛生の重要さを痛感しました。

新型コロナウイルス感染症は、様々な物を奪っていった一方で、いつも通りの生活がいかにかけがえの無いものかを教えてくれたようにも思います。共有する時間の増えた家族にも、遠隔授業を行ってくださる先生方にも、医療・社会機能維持に奮闘されている方々にも、改めて感謝の念を持つとともに、これからも続く変化に対応していこうと思います。

医学部

医学科5年次　宮地　貴士

新型コロナウイルス感染症が拡大した昨年3月、私はアフリカのザンビア共和国にいました。無医村における住民の健康を支えるために医療施設の建設に取り組んでいたのです。しかしながら、感染がアフリカ大陸にも広がりプロジェクトの途中で緊急帰国を余儀なくされました。少しでも早く、住民の命を守る場所が出来上がることを願っています。

帰国後は、社会のニーズに答えられる一人前の医師になるために病院実習に励むつもりでしたが、感染防止の観点から患者さんから直接学ぶ機会は減ってしまいました。

少しでも空いた時間を有効活用しようと、現在は、主に新型コロナウイルス感染症に関する医学論文を読み込み、自分の意見を発信しています。先月はアフリカ大陸にどのような経路でウイルスが広まったか、各国政府の発表をもとにデータをまとめ、英国の医学誌に発表しました。

今後も自己規律を保ち、今できることに全力で取り組んでいきます。

医学部

保健学科1年次　長崎　安依南

高校三年生の頃、面白い大学生活が待っていると期待を膨らませていました。新型コロナウイルス感染症の影響で入学式は中止となり、本当に大学が始まるのか、同学年の人や先輩方に会うことが出来るのかと、不安に思う日々が続きました。

外出自粛生活の中、人は何か生活に面白いことがないと、生きていくことが辛くなってしまうと感じました。また、友人や家族と直接言葉を交わすことが、心に安らぎを与えてくれると感じました。そして、日々の生活は色々な職種の方々のおかげで、成り立っているのだと改めて思いました。このような大変な世の中で懸命に働いている方々には、感謝の気持ちで一杯です。

まだ油断はできません。感染を拡大させないようにやるべきことをしっかりやり、後期には大学構内で勉強できることを楽しみに、前期の遠隔授業を頑張りたいです。

医学部

保健学科4年生　宮崎　悠

課外活動の様子（一番左が宮崎さん）

日々を過ごしていました。そんな時、オンライン上で実習に近い形での演習授業の実施や、学生による運動指導を行うことにより、4年生としての自覚を持ち生活することができました。今は、十分な情報を得られないまま開始する就職活動への不安、実習での経験が浅いまま働くことへの不安などを、感じずにはいられません。しかし、「コロナを乗り越えた強い世代」であることを示せる、理学療法士になるために、この状況に屈せず精進していきたいと思います。

病院実習以外で、こまめに手指消毒を行う生活を送るとは、想像もしていませんでした。新型コロナウイルス感染症の影響で私たちの暮らし方が大きく変化しました。普段の生活に留まらず学習面にも及びました。私たちは、4年生の4月から始まる病院実習に向けて、着々と準備を進めていました。しかし実習は延期となり、気が緩んでしまうことが増えました。焦りと不安を感じるものの、どうしても身が入らない

理工学部

理工学部長

山村　明弘

新型コロナウイルス感染症は私たちの生活の様々な場面に暗い影を落としており、2007年の世界金融危機後に起きた社会構造の変化と並び称されるニュー・ノーマル（新常態）への対応が求められるようになりました。首都圏における過度な人口集中、医療現場の疲弊、多くの企業における画一的な勤務時間設定など解決すべき課題は山積しています。それではニュー・ノーマル時代に向けてこれからの科学技術や教育研究に何が望まれているのでしょうか？

遠隔授業やオンライン会議ではZoomなどのクラウドツールを活用するビジネススタイルが浸透しサイバー空間とフィジカル空間を融合するSociety 5.0が身近なものになりました。政府の提唱する「新しい生活様式」ではテレワークや時差出勤を活用した多様な働き方が想定されており、人との接触を避けるため印鑑の廃止、遠隔診断、通販などのより一層の推進が求められています。ニュー・ノーマルに適応する技術革新を加速するには、古い慣習や考え方にとらわれない多様な価値観や創造力が原動力となります。科学技術の知識・技能とともに社会実装の構想力と独創的な着眼点が重要です。理系人材の持つ論理的考察力のみならず文系人材が持つ社会科学的な柔軟な発想を融合した科学技術が期待されています。経済的な効率性だけではなく環境破壊などをバランスよく考察できる人材は、ニュー・ノーマル時代に希求される人材となることでしょう。

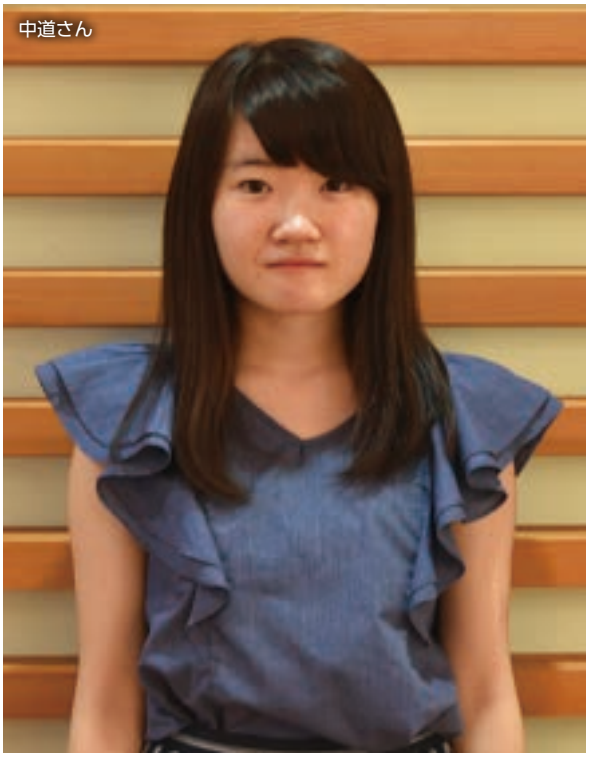
オンライン授業の様子

理工学部　システムデザイン工学科1年次　中道　萌

4月6日の入学式は、挙行されませんでした。予定されていた学生との交流イベント等もすべて中止。仙台駅で家族と別れ、新しい地で一人暮らしが始まりました。

初めて親元を離れる上、新型コロナウイルス感染症の影響で普通の生活ができず、これからの日々に焦りを感じていました。そんな夜、ふと携帯電話のベルが鳴りました。友人からでした。近況報告や、思い出話を通じ高校時代に戻れたような気がして心が軽くなりました。久しぶりに自分以外の人の感じ方・考え方に触れ、知らぬ間に内向的になっていた自分に気付かされました。

先生方のご協力もあり、自宅で問題なく授業が受けられます。ネット1つで映画も読書も買い物もできてしまう反面、自粛生活の中あらゆることが家にいるだけで完結してしまうことを少し怖くも感じます。自分一人で選びとることの自由が、わがままな人間を作ることもあります。世界中が未知のウイルスと向き合っている今、ステイホームしている誰かに電話をかけてみませんか。


中道さん

今野さん

理工学部　生命科学科2年次　今野　杏花

自粛期間は不安でいっぱいでした。

自粛が始まったばかりの頃はニュースで毎日放送されていても自分の生活に影響が出るとは思っていませんでした。自分の時間を好きなように使い、なにも縛りがない生活に満足していました。しかし、時間が経つにつれ、夜更かしをしたり、1日3食だった食事が2食になったりと生活リズムが乱れ、不安を覚えるようになりました。今振り返ると、自分でも知らないうちにストレスを感じていたことで起こった変化だとわかりますが、その時は自分がどうしてそのような状態になってしまっているのか理解できませんでした。

自粛期間を通して、これまでの日常が当たり前ではないことを学びました。ただ、人と会わない、外に出ないだけでこんなに不安になるのだと、実際に体験するまではわかりませんでした。この期間で改めて普段通りの生活が送れることのありがたさや、友人の大切さに気付かされました。残り2か月オンライン授業が続きますが、生活リズムを意識して過ごすなど自分の心と体のバランスをとりながら勉強に励みたいです。

新型コロナウイルス感染症の影響と終息後の世界

秋田大学経営協議会委員　そーせいグループ株式会社　取締役　加賀　邦明

今世紀はパンデミックの世紀と言われてきた。この10年で新型インフル、SARS、MERS、新型コロナウィルス感染症(以下コロナと略)と4回も世界を震撼とさせてきた。コロナの被害は人命のみならず経済的な影響も極めて甚大となった。グローバル化の進展により世界の人の交差は高速化し、人類による自然破壊が自然界と人間界の境界線を無くし未知のウイルスとの遭遇も増えた。パンデミックが起こるのは必然であり、今後も新たなパンデミックが起こることは間違いない。

今回のコロナで見えてきたことが多くある。一つは指導者の資質である。ドイツのメルケル首相がロックダウンを実施する際に国民に語りかけた自由の尊さを込めたメッセージは世界中の人を感動させ、ニューヨーク市長の科学に基づいた対応は理知的で納得性があった。一方でコロナの脅威、科学の大切さを軽視した初動ミスで感染の拡大をもたらした国もあり、指導者の資質がコロナの被害の多寡を決めている。

日本では国政より地方自治の長の対応が際立った。今世紀の課題の一つである「集中から分散」というパラダイムの変化が見えてきた。効率を重視した集中社会から、機動性の高い分散社会への移行である。地方自治の長はその大切さを認識しており、明るい未来を予感させるリーダーが地方から出てきたのは嬉しい。医療では初診からオンライン診療を認め岩盤規制を崩しつつあるが、教育に代表されるようにデジタル化の遅れを露呈させ、デジタル世界では後進国であることが明確になった。世界ではコロナの死亡者は低所得層が明らかに多く、格差の問題が顕在化した。

パンデミックは、その終息後に格差を縮め価値の変化をもたらした歴史がある。現状はコロナバブルで格差を広げているが、格差是正のため、富の再分配を財政的に行うことが為政者の仕事の筈である。フランスの経済学者のジャック・アタリ氏が指摘するように医療・食・水・衛生・教育・情報・再生エネルギー・輸送・デジタル産業等が価値ある分野として期待され、自動車、石油、大衆化した観光などは時代に即して業態が変化していくだろう。今後は持続可能な社会形成へと向かう事が必須である。テレワークが象徴するようにインターネットの利便性がより重要と認識され、デジタル化が進展し、人工知能も相まって、一層知識社会の経済が発展していくだろう。学生の皆さんにはより多くのチャンスが来たと言える。自分を高め貪欲に知識社会形成に関与していけるからだ。

また、最近の研究で日本人の幸福感はGDPと相関せず、コロナ禍で幸福感の格差も拡大しているようだ。幸福感の高い人は物事を俯瞰的に見ることができ、利他的行動をとり、多様な仲間がいる傾向がある。このような時期だからこそ「つながり」が幸福感の格差を埋める鍵となり、会話、励まし、手助け、感謝を表す事が重要という研究成果を今一度熟考する時期ではないだろうか。協力は競争より価値があると思うのは筆者だけだろうか。

若さには可能性がある

秋田大学経営協議会委員　東北大学名誉教授　吉本　高志

新型コロナウイルス感染症が、多くの人々の日常の生活を、根本から長期間にわたって奪っています。そして、その終焉も解らない状態です。

ところで、総務省の２０１９年の発表によりますと、我が国の総人口は前年より27万人少ない１億２６１６万人であり、その減少数は１９５０年以降最大でした。年齢別では、15歳から64歳の生産年齢人口は最低を更新し、一方、高齢者は過去最高、14歳以下は過去最低でした。そして、47都道府県で減少率が最も高かったのは、人口96万人に減少した秋田県で1・48％でした。

更に、本年、子供の日を前に、同じく総務省がまとめた４月１日時点の14歳以下の子供の数は、前年より20万人少ない１５１２万人で、総人口に占める割合は12％であり、１９５０年以降最低を更新しています。その中でも、最も低いのが秋田県であり、全国で初めて10％を切り9.8％でした。

これらの数字は、我々の秋田県が、我が国の超少子高齢社会の最先端に位置していることを如実に示しています。この事実に伴い、様々な社会現象とも言われる、多くは負の事象が発生しています。私の専門の数字から一つだけ挙げますと、２０１９年２月の時点で、国が定めた二次医療圏単位で、最も医師数が少ないのは、秋田県・北秋田医療圏でありました。

さて、コロナの緊急事態宣言と共に「三密」と言う言葉が大変有名になりました。コロナウイルス感染症の発症数に関しては、秋田県はゼロではありませんが、大都市圏とは大いに異なりました。

これまで、少子高齢問題を、産学官を中心に様々な方々が真摯に議論され、その対策を実行してきました。一方、若者を、この議論の中に積極的にとりこみ、彼ら、彼女らに、リーダーシップを委ねることはあまり無かったと思います。

コロナ禍の時期に、国や自治体で生活様式の変化を基に、未来会議などが持たれておりますが、今後、新しい時代の流れが生まれる可能性があります。秋田の地に、新しい文化が、特に「若者」により創造されることを願っています。

Aprire 秋田大学広報誌 アプリーレ
No. 68
2020.07 JUL
企画・発行 国立大学法人 秋田大学 広報課 秋田市手形学園町1番1号 〒010-8502 TEL:018-889-3019 FAX:018-889-3242 E-mail:kouhou@jimu.akita-u.ac.jp

新型コロナウイルス感染症対策の学生支援制度

秋田大学独自の支援

学生への緊急支援事業（秋田大学奨学資金の貸与）

新型コロナウイルス感染症の拡大により、アルバイト先の休業や保護者からの仕送りの減少等によって生活に困窮している学生が修学を断念することがないよう、秋田大学では独自の貸与型奨学金制度を行っています。

学生本人の収入（アルバイト収入、仕送り等）の減少等により、一時的に学資（授業料・教材費等）及び生活費の支弁が困難な場合は一人30万円以内を、学費（入学料・授業料）の支弁が困難な場合は入学料・授業料相当額を貸与します。

●お問い合わせ先：秋田大学学生支援・就職課学生生活担当
TEL 018-889-2265

国の支援

「学びの継続」のための『学生支援緊急給付金』文部科学省事業

今回の新型コロナウイルス感染症拡大による影響で、世帯収入・アルバイト収入の大幅な減少等により、大学等での修学の継続が困難になっている学生が修学をあきらめることがないよう、現金を支給する事業です。

給付額：住民税非課税世帯の学生20万円、それ以外の学生10万円

●お問い合わせ先：秋田大学学生支援・就職課学生生活担当
TEL 018-889-2263

【特別定額給付金】総務省事業

「新型コロナウイルス感染症緊急経済対策」において、感染拡大防止に留意しつつ、簡素な仕組みで迅速かつ的確に家計への支援を行う事業です。申請期限は、郵送方式の申請受付開始日から**「3か月以内」**

給付額：10万円

●お問い合わせ先：住民票のある市区町村

自治体の支援

※秋田県内のみ掲載　出典：県内各市町村ウェブサイト（地元の市区町村をご確認ください）

【学生生活支援給付金】給付額：5万円…小坂町
【学生生活支援臨時給付金】給付額：5万円…北秋田市
【大学生等応援臨時給付金】給付額：5万円…八峰町
【大学生等応援給付金】給付額：5万円…能代市
【学生支援給付金】給付額：10万円…三種町
【学生生活支援臨時給付金】給付額：5万円…八郎潟町
【生活急変学生等支援金】給付額：5万円…井川町
【学生生活緊急支援給付金】給付額：月額2万円（令和3年3月まで支給）…にかほ市
【学生応援臨時給付金】給付額：10万円…東成瀬村
【学生応援給付金】給付額：5万円…美郷町

※対象要件や申請期限は各市町村により異なりますので、詳細はお問い合わせください。

秋田大学みらい創造基金

ご協力をお願い申し上げます。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、学生が経済的な理由により修学を断念することがないよう、秋田大学では政府等による奨学金制度に加えて、授業料の減免や本学独自の貸与型奨学金制度「秋田大学奨学資金」を行っているところです。また、学部新入生に対しては給付型の奨学金制度「新入生育英奨学資金」による支援も行っています。これらの対策は秋田大学みらい創造基金に寄せられた皆様からのご寄附により実施したいと考えております。今後も継続的な学生支援を行うため、秋田大学みらい創造基金へのご寄附によるご支援を賜りますようお願いいたします。

寄附者ご芳名

この基金の趣旨にご賛同、ご協力いただきました皆様へ、心より感謝申し上げます。今後とも秋田大学の教育・研究活動等に対し、格段のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

企業・団体等

株式会社アイネックス　様
株式会社秋田魁新報社　様
株式会社秋田新電元　様
株式会社秋田スズキ　様
秋田大学有志一同　様
秋田テレビ株式会社　様
秋田水処理株式会社　様
アルフレッサファインケミカル株式会社　様
石垣鐵工株式会社　様
伊藤建設工業株式会社　様
株式会社KANEKO　様
北日本索道株式会社　様
株式会社協豊製作所　様
株式会社クリステンセン・マイカイ　様
社会医療法人興生会横手興生病院　様
有限会社サイカツ建設　様
佐田建設工業有限会社　様
三共ホールディングス株式会社　様
株式会社サンワ　様
すずきクリニック　様
株式会社住建トレーディング　様
医療法人正和会　様
TDK株式会社　様
一般財団法人丁酉会　様
東北電材株式会社　様
DOWAホールディングス株式会社　様
株式会社トラフィックレンタリース　様
中田建設株式会社　様
日本化薬株式会社　様
東日本電信電話株式会社　秋田支店　様
東日本物産株式会社　様
三井金属鉱業株式会社　様
株式会社宮原組　様
株式会社むつみワールド　様
山二建設資材株式会社　様
有機互販会事業組合　様

個　人

相原　紘一　様
青木　洋大　様
浅田　昌弘　様
朝日　昌義　様
伊賀　敏朗　様
池上　俊哉　様
池山　友邦　様
石井　瞬　様
石川　庄一　様
市川　逸郎　様
伊藤　一弥　様
猪股　祥子　様
榎本　克彦　様
大高　麻衣子　様
大竹　百世　様
大場　司　様
大森　潤一　様
奥原　夫佐　様
奥山　順子　様
小野寺　重人　様
小山　芳克　様
加賀谷　長之　様
加藤　弘毅　様
加藤　房子　様
叶野　みずえ　様
亀山　正敏　様
木口　哲也　様
喜多　隆三　様
北畠　伸顕　様
工藤　秀一　様
國吉　幸男　様
黒川　和弘　様
黒沢　裕子　様
桑島　精一　様
煙山　紘平　様
後藤　勲　様
齋藤　稔　様
笹川　忠善　様
佐藤　愛子　様
佐藤　健一　様
佐藤　賢治　様
佐藤　祐一　様
佐藤　佑樹　様
澤口　健治　様
澤田　隆　様
三戸　学　様
島田　孝蔵　様
清水　一用　様
進藤　力三郎　様
陶　光憲　様
菅原　孝悦　様
鈴木　一郎　様
須藤　哲　様
高木　弘子　様
髙頭　務　様
高野　華澄　様
髙橋　邦泰　様
田口　正美　様
巽　司　様
田畑　祐助　様
田村　茂勝　様
千田　稔　様
戸澤　秀雄　様
冨内　真　様
鳥谷部　荘八　様
仲澤　公司　様
長田　信夫　様
那須　和佳子　様
丹羽　誠　様
布谷　博　様
波多野　宏治　様
原田　幸市郎　様
藤井　蘭子　様
藤原　敬一　様
保坂　雅夫　様
堀川　喜久　様
増田　浩明　様
松木　直人　様
松葉谷　治　様
松本　栄一　様
三田　重人　様
三宅　佐代美　様
宮野　素子　様
山田　久仁夫　様
山田　志津子　様
山本　洋二　様
吉岡　尚文　様
渡部　正樹　様

他　匿名希望　66名様・法人様（延べ数）（令和2年2月～5月末入金分　五十音順）

お申し込み お問い合わせ先

秋田大学みらい創造基金事務室　〒010-8502 秋田市手形学園町1番1号　☎018-889-3266
秋田大学みらい創造基金は、秋田大学公式ホームページからもお申し込みいただけます。
https://www.akita-u.ac.jp/honbu/ed_fund/index.html